

Title	企画の概要
Sub Title	
Author	
Publisher	三田哲學會
Publication year	2005
Jtitle	哲學 No.114 (2005. 3) ,p.i- iv
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000114-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

企画の概要

現代社会はさまざまな側面で、グローバリゼーションの波に洗われている。これにともなって、学問をめぐる状況の変化も急である。各国の大学は大きく変化しはじめている。そのなかで、変化の波は、19世紀以来世界の大学にモデルを提供してきたドイツの大学にまで押し寄せている。最近、学問や大学の危機について、各地で声高に叫ばれている。その一方で、大学は世界中に急速に普及し、今ほど安定した時代はない。大学は制度化され若者の教育機関として広範に定着するにいたっている。大学の存在を疑うものはいないといっても過言ではない。まさに大学は20世紀を通じて、世界中に定着し時代を謳歌している。大学が危機なのは、大学の拡大にともなう財政問題でしかない。大学の社会への浸透が、逆にこれまでの大学人に危機をもたらしている。大学の変化はアメリカ、イギリス、ドイツ、フランスなど先進国に共通した現象である。大学の変化は急速に進んでいるグローバリゼーションの一環なのである。

近年、社会の大きな変化にともなって、学問観も変わってきた。ソヴィエトの崩壊は冷戦下で培われてきた科学観を変えた。社会科学の研究は現象の背後に貫徹する「法則」や「真理」を求めるものではなくなっている。19世紀末以来の学問的真理や社会科学に関する認識が変わってきた。社会科学の衰退がいわれるとともに社会科学像も変化している。研究者のテーマは現象の背後にある〈本質〉を求めるというのではなく、日常的な社会問題の解決策となっている。

最近の社会学像の急激な変化は想像もつかないほどである。社会学の対象の多くは、もはや大学の教員が一番知識をもっているところではなくなっている。学者はどこにでもいる時代となっている。A. ギデンズが強

企画の概要

調するように、社会科学の知識は一般化されるほど社会の内部に取り込まれ、その成果は自明のこととなる。社会学の知識は、単純な増加形態を示さない。このため社会科学の業績は成功によって、かえって覆い隠される側面がある。この点では、社会科学は自然科学よりもはるかに強い影響力をもっている。しかも社会科学はつねに回帰的側面をもっている。

都市社会学はイギリスで、P. ゲデスによって“Civic Sociology”として登場した。その都市社会学はL. マンフォードによって発展されることになる。また、シカゴにおいてもC. ズェブリンによって継承されていた。しかしR. E. パークたちは都市問題から「社会福祉」や「都市計画」の側面を分離することで、新しい都市研究を求めた。ここに人間生態学を理論的支柱とする科学的な都市社会学“Urban Sociology”が生み出されたのである。その都市社会学が日本で再び都市計画や社会福祉の分野を付け加えようとしている。その意味では、都市社会学は原点の確認を必要としている。もちろんそれは、たんなる原点への回帰ではない。都市計画や社会福祉は、各国の国民国家としての約一世紀の歩みのなかで、独自のものが形成されるにいたっている。しかしここで、都市社会学をその原点に遡って検討することは決して無益なことではないだろう。最近の社会の急激な変化は都市生活を社会科学的に研究するというそのあり方の再考を必要としている。

社会学の研究に際して、社会の概念がこれまでの経緯から、理論や法則の概念と関連づけて考えられがちである。この意味で、社会の概念はいささか手垢のついた概念となっている。今日ではかつて社会の概念で考えられたものが、新しく「公共性」の概念によって、とらえられる場面が増大している。社会が「理論」の構築を志向するのにたいして、公共性は「型」の呈示を志向する。公共性の概念は〈公〉と〈私〉の関係を分析軸にして、斬新な議論の地平を拓いている。この意味では、公共性の言葉は一面で、かつて社会という言葉で語られていたことの別の側面を言い表し

ている。本特集号はこうした観点から企画したものである。

A 編はゲデス・プロジェクトの成果である。

第I部はP.ゲデスの都市論が都市社会学の原点ともいえる研究であるにもかかわらず、その後の都市社会学の発展のなかで、どのように埋もれていったのかということをはっきりと明らかにしようとするものである。ここでの議論を通じて、社会学の研究がこれまでほとんど触れてこなかった側面を析出できればと考えている。

第II部はロンドン社会学会でのゲデスの1904年と1905年の報告である。両者は『社会学論文集』の第1号(1905年)と第2号(1906年)に収録されている論文の翻訳である。ゲデスの報告はもちろんのこと、司会者・討論者の発言ばかりか、報告後の新聞や海外からの反響までが収録されている。これにより現在とは違った当時の学会のあり方が伺える。

第III部はJ.ブライスの『社会学論文集』第1号の巻頭の論文の翻訳である。この二つの論文は社会学会への期待と20世紀初頭のイギリスで、社会学がどのような学問であると考えられていたのかを窺わせるものである。それに続くF.ゴルトンの論文は当時の社会学において、大きな影響力をもっていた優生学に関する論文ではある。この有名な論文は社会学会が結成された後、1904年5月16日にロンドン大学の会議で最初に報告されたものである。それに続いて、7月18日に第I部のゲデスの第1論文がロンドン大学で報告された。このゴルトンの著名な論文の翻訳は今回が初訳ではないかもしれない。しかしこの論文の翻訳が入手できないことを鑑み今回思い切って訳出することとした。最近の社会学は「身体論」への関心の高まりから、優生学的なものに関心が寄せられている。このため今回の訳出も何らかの意義を認めてもらえると期待している。

B 編はプロジェクトのメンバーの研究論文を「身体と公共性」という大

企画の概要

きなテーマのなかで収録した。最近、社会学の研究において、身体への関心が著しく高まっている。社会学研究も身体に焦点をあてることで、従来とは違った議論の地平を拓いている。このことは、また、新たな公共性の議論とも密接に繋がっている。現在、身体の問題はこれまでの公私関係を問い直す幾多の問題を提起している。ここでの論文はその素材として提出されたものである。ここでは身体と環境の関係、身体と国家の関係、医学と身体との関係の3つの論文を収録した。

投稿者は翻訳と論文の両方に挟まれながらの執筆だけに、悔いが残るところがなかったわけではない。しかし体力にまかせて時間を作り出し、何とか形をとることができた。残念ながら、期限に間に合わなかったメンバーには、別の機会を期待することとなった。